

阿井・大馬木連中編『出雲筵』

——手錢記念館所蔵俳諧資料（十三）——

伊藤善隆

（立正大学）

摘要

出雲市大社町の手錢記念館に伝来する俳諧資料の中から、『出雲筵』（阿井・大馬木連中編、安永五年魚坊序、橘屋治兵衛刊）を翻刻紹介する。

キーワード・俳諧、美濃派、魚坊、橘屋治兵衛、手錢記念館

はじめに

『出雲筵』は、阿井・大馬木（現在の島根県仁多郡奥出雲町）の美濃派俳人の撰になる俳諧撰集である。

本書の序文は、中島魚坊が記している。魚坊（享保十年～寛政五年）は、石見国安濃郡大田南村出身の美濃派俳人で、初号を美川、別号を猿中窟、隣江庵、鬪草子、橘皮仙人、しのぶ庵、徒然庵などと称した。父も仙石盧元坊門の俳人で美三と号した。はじめ和漢の学と俳諧を大田の中島見龍（俳号流露竹）に学び、のちに美濃派の田中五筑坊に師

事した。また、和歌は杵築の広瀬百羅に学んだという。宝暦十年、大田の大火で焼け出され、城平（大田町大田字城平）に潜魚庵を結ぶが、四十四歳のときに愛児を失い、剃髪して魚坊と号した。その後、安永八年に坂田村（出雲市斐川町）の豪農である勝部見山（魚坊門の俳人）の援助を得て出雲へ移り、隣江庵を結んだ。その後、斐伊川の付け替え工事に際しては伯州米子に移ったが、再度出雲の今市へ戻ってしのぶ庵を結び、そこが終の棲家となったという（桑原視草『出雲俳壇の人々』（昭和56年8月、だるま堂書店）参照）。

本書は、おそらくは魚坊の指導のもと、阿井・大馬木の俳人たちが編集刊行したものであろう。なお、中和夫『天明の俳人中島魚坊』

(私家版、謄写版、昭和33年12月)は、本書を魚坊の著作としている。

魚坊の著作としては、『夢のあした』(安永八年十月序、橘屋治兵衛板)が知られている。同書には、比較的長文で印象的な内容の序文が記載される。すなわち、旅行中の魚坊が夢の中で蕉門俳人の加生(凡兆の初号)に会い、加生の記した「俳諧文」を示され、それを読み終えて当世の俳諧を覗いていると眠りから覚めた。その後、ある人の家で「元禄二年加生稿、正竹書」とある一軸を見たところ、その内容は、まさしく夢の中で読んだ加生の「俳諧文」であった。そこで、その「俳諧文」を世に埋もれさせないために『夢のあした』を編んだのだ、という趣旨の序文である(石川県立図書館月明文庫蔵本を参照)。

全くの想像になるが、おそらく、魚坊はある人の家で実際に加生の「俳諧文」を見たのだろう。そして、それを世に紹介するに際し、それは自分が夢の中で予め見たものだった、という虚構を設けて序文としたものではないだろうか。なお、松井立浪『俳人魚坊』(昭和25年9月、報光社)には、この序文の後半が(一部の文言を脱するが)「俳諧文」という標題で収録されている。

当然ながら、本書入集の俳人たちと、『夢のあした』に入集する俳人たちには、共通する顔ぶれが見える。両書とも、石見・出雲の美濃派資料として、また魚坊の資料として貴重なものといえよう。

しかし、目下、『出雲筵』は、国文学研究資料館ホームページ内の「日本古典籍総合目録データベース」に記載がなく(令和元年9月26日確認)、島根県立古代出雲歴史博物館が別の一本を所蔵する(岡宏三氏のご教示による)他には所在を聞かない。ここに翻刻紹介する所以である。

〔書誌〕

書型……半紙本一冊。二二・八cm×一六・〇cm。袋綴じ。楮紙。

表紙……薄縹色布目原表紙。

題簽……原題簽。中央無辺。「出雲筵」。

序文……「安永五丙申のとし 潜魚庵主」(魚坊序)。

版式……無辺無界每半葉八行。

字高……一五・三cm(序文一行目「いつもく民部式」を計測)。

奥書……「阿井／大馬木／連中撰」。

刊記……「洛書林橘屋治兵衛梓」(裏表紙見返し)。

丁数……全一六丁(丁付は柱に「一」〜「十六」)。

備考……第一丁表に、蔵書印「冠李」(方印)を捺す。

〔凡例〕

翻刻にあたり、句読点、濁点、半濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。なお、原本にある濁点には、「・」を付した。また、異体字は通行の字体に、片仮名は平仮名に適宜改めた。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。

〔翻刻〕

出雲筵

(白紙)

〔表紙〕
〔題簽〕
〔表紙見返し〕

〔无分別〕(剝除)

序

いづもむしろのたゝみは、延喜式、民部式にもありとかや。さるは、此国の産にして、今も松江の城下に縁取町とて是を業とするもの多し。それをかの清少納言はいやしげなるものに書残されしが、げにも裏は世にいふあらむしろにして、表は備後の(一)結構にあらざれば、中品以下の重宝となりて、とみの客には塵をかくし、簀の子椽の下冷をもふせぐにたれり。名におふ十符の菅菰はしらず、花蘆のはなやかならんより、手みじかに今日の用を調ふれば、我家の俳諧といふものに似かよひて、歌人(二)、連歌師はいやしむなるべし。さはいへ、俗談平話のいやしげなるも、心は向上の一路に遊ぶべしとぞ。高麗縁のことゝしき媚を求るは異門の沙汰にして、布縁の平生ならんには、例のさびしく、例のおかしく、此国に正風雅の絶ざらんことをと、そこらの連衆に(三)一小冊をすゝめて、その名をいづもむしろと呼ぶことになん。

潜魚庵主

安永五丙申のとし

〔潜魚菴〕(刻陽) 〔美川〕(刻陰)

一(ウ)

春

野遊びの催ひもやすし此むしろ

魚坊

蝶を效ふてつい友に友

路考

学文をちくと出す気のうらゝかに

何遠

洪ひ茶ながら入加減あり

洞李

傾いてもまだしばらくは残る月

一柳

稲番小屋もその露の中

嵐岫 一(オ)

恵、深き御製と誰も覚え居り

時習

旅から旅にもはや三年

独鷗

折あける波も子しらず親しらず

由之

今まで青い空がぐれりと

樂水

鉢植の花咲するもおかしうて

草肥

預り君の御意もあたゝか

坊

二 さつぱりと面皷(ニキ)の直る潤肌膏

考

祇園あたりへ近き賑ひ

柳

雪のたしない冬でこそあれ

李

立枯れの木を薪にとわらせ置き

習

檀家へ呼れ事に出かゝり

鷗

十五夜は過たけれども月は月

之

静な秋や風の音まで

水

ウ 好あふた中をそはせて落つかれ

肥

方便といふ二字は恋にも

筆

花の世と名が付初る比なれば

牧牛

霞むあけほの霞むゆふぐれ

一(ウ)

夏

又と雲むしろ敷ふぞ門涼(ミ)

独鷗

瓜のあまりを呼りゆく月

魚坊

さるほどに賑やかな世の賑ひて

以文

本歌から出た狂哥也けり

梅一

ウ けふも只膝かゝ居る此寒さ

徐行

寺の男が何用で来る

常太

竹の根や石やまじりて開き畑

瓦雀

一(オ)

降そふにした雲がどこへか

お祓をうやくしくも戴かせ

磨かでおしいあの娘ども

比も今花に明ては花にくれ

囀り倦ずしてうぐひすの

^二右左り京を真似たる豆腐茶屋

四花よりはやふ利く気養生

伯父のいふことも合点の先まくり

夏はどふでも打もの、鏝

つたひ来る梢の風のそよくと

名のみあはれに爰の恋塚

観念もころの月が晴ければ

さはつて腫るやうな秋の蚊

ふりさける馬の粥桶ふたつみつ

日和あがりにも水も引沙汰

花の香の次第くいにやまして

何に遊ぶも春は珍重

秋冬の二巻は後編の沙汰にもおよぶべしと

諸国発句

老となるまで嬉し恥かし魂祭

広ければ広い野梅のほひ哉

挑灯に顔そむけるや門涼^ミ

最一しほは残すもさすが桃の花

また水が葉に持たいかつはの花

石明

東下

道楽

作洲

鷗

坊

文

一

行

太

雀

明

下

楽

洲

花十

筆

ひとりみて聞所もあれ寒念仏

解く時に結ひ人うらなふ粽哉

鶉遣ひや鶉に遣はるゝともしらで

都でもその気で見れば山ざくら

更る夜や次第にふへてなく蛙

焚かげん婆々がおしへて蚊遣哉

梅か香のはつと野中に捨りけり

たてよく此沢からも暮の鳴

いかさまに屋敷も広し桐の花

求めずに竹は竹とて只涼し

そろくと又日直るか揚雲雀

花のさく世を余所にして干蕪

尋ぬれば宵の蚊屋から團哉

初ものゝあるが中にも月夜哉

聞たこの人もなつかしほとゝぎす

ひとつふたつ蝶飛ぶ庭や雨あがり

出つ入つ鳥は何かも夏木立

水鶏啼や最ふそのみに更わたり

もたれあふ浮世はやすし紙雛

春の野や多葉粉吸く物囉

出た跡に錠もおろさず寒念仏

夕栄えや柳も軽ふ水のうへ

冷やりと人も寐よいか星の宵

一里来て今あけほの、桜かな

掃ぬこそよけれ紅葉の秋なれば

岩手 万裏

傘狂

斗悠

文水

唯兮坊

朔花

文川

白千

密古

相与坊

凉阿坊

素鳩坊

呂杉

見尔

壺江

宇曲

以之

素陽坊

馬六

丁牧

麦士

棠故

可推坊

祐阿坊

「(ウ六)

「(ウ七)

「(ウ八)

「(ウ九)

おそろしい木下曇りや蝸牛

灘谷 女郎川

京都 朴齋 一(十)

咲たりといふ間が花よけし鳥

女 五葉 一(ウ八)

しぐる、や売れはぐれたる牛の柴

勝山 巴文

桃児

永き日の窓静也蛇の声

越後長岡 娛山

龜遊

庵借してことしも星につかはれぬ

可團

白伍

穴一をたらし寄せてや二日灸

六川

文支

つ、じ咲や砥石の出るも此あたり

堀之内 徐々

撰兵庫 尔梅

まがふ葉も秋はわかりて草の花

井栗 牧牛

紀和歌山 風後

川ひとつ越えて都の霞かな

出雲崎 仙風

僧 雲止 一(ウ十)

余の草は取りて涼しき青田哉

出羽鶴ヶ岡 杜考

讃岐多度津 雲江

春も一先づ此事よむめの花

大石田 只狂

伊予松山 蘭之

よいほどにおしまずともしぐれ哉

鳳宇

豊後日田 筆馬

春めいた事や若葉のどれくも

米沢 幸五

肥後熊本 慈士

秋たつやこゝろ覚えの草の犬

知名

梅夕

傘さいて茶園見廻るや春の雨

女 雨翠

百童

こちの気もすまふに成て角力哉

東夕

渭鳥 一(ウ十一)

葉は葉とて動きもするに牡丹哉

紅二

徐来

雨もよし埃たつ日の若葉には

奥仙台 登節

益城小池 素木

暗ふなる裾野もしらで雲雀哉

武江 文岡

宇土 和斗

あるじさへ寐好として垣の萩

杏花

肥前長崎 李童

人影も鳥に遠し秋のくれ

東為坊

霽呂

鹿の音や昼見た山は隔つても

左来坊

里美

すゞしさや取ちらしても粽笹

逸呂

越語

蜘蛛の罫の梢に光るあつさかな

玉泉

備前岡山 松後 一(ウ十二)

だまつては居られぬ春か啼蛙

火のものはよいかと蚊屋に這入けり

角出して居ても恥ぬか蝸牛

鴨の立た其跡らしや薄氷

ついと来て啼もせず只賜一羽

涼しからん心が先へあの峠

ちと待て暮くも見てゆけあやめ売

撰待や扇子も汗も置いて行

下戸らしい顔の集る火鉢哉

むしのねや夜も長く〜と聞ちかう

最ふとふかひつそとなりぬ天河

鐘撞も心得てつけ星の暮

芦の穂やまねけど舟はむかふ岸

鯛や片手に笠も提ながら

夕風に延しのばすか鹿の声

柴折て虻はらひ行山路かな

秋の草やどれも咲ぬはなささふな

子供等よ柳折る事はけふばかり

山吹やあれでも汲まば濁ふか

昼がほや一里あまりもあそこ爰

ふたつみつ暮染見せる蛍かな

初雁やさびしみのつく海の上

霞日や咲ぬ梢も咲たのも

囉らひ乳に團さし置く蚊遣哉

松宇

壺外

素文

貫里

里正

枝景

龜遊

礎洞

八舟

里川

琴阿

閑郷

舟月

怨風

嵐河

以貫

此錦

梨般

百丈

素人

三考

何人

林翠

箕流

周防山口

富田

徳山

富田

富田

山代

長門萩

石見津和野

益田

大田

湖洲

大田

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

湖洲

濡色や道はかはけど春の草

雪舞や茶屑も掃て流しけり

置頭巾似合ぬ比も有たれど

汲んでゆく跡やゆづりて谷清水

月涼し〜とて何所までも

沓替えて馬休ませる清水哉

宿引の出むかふ頃やふじの花

禁迄来ればとてもと山桜

さふかとして西へもむかず蓮の花

待雲や照るも曇るも片ごゝろ

糞土に添ふても疲し野菊哉

がさ〜と鳥のくゞるや釣干菜

昼顔や浪は涼しうよせれども

秋風や庵の柱をつたふ蟬

誰か摘し水菜の屑ぞ細流れ

此ごろは何所へさそふも桜かな

涼しさや外心なふ橋の上

よい中は涼しいものぞ竹婦人

世にすねて糸瓜作るや垣隣

一しぐれ夕日の中を通りけり

あの嶺は曇らずに居る紅葉哉

笑はれにちと手伝ん笹粽

草屋根に星のきらめく霜夜哉

肌ぬいで筏流すも小春かな

暮鳥

支川

魚坊

途川

不鳴

竹裡

其水

沛艾

野文

富連

独鷗

南窓

此橋

文露

瑞草

曾秀

渭川

素琴

驢漢

花十

桃川

一路

芦中

其流

サツカ

波根

不鳴

出雲松江武門

竹裡

其水

沛艾

野文

富連

独鷗

坂田

今市

神西

加茂

瑞草

曾秀

渭川

素琴

ハタヤ僧

木次

花十

桃川

一路

声のとゞく隣も持たず雪のくれ
色外にあらはるゝとや雉子の声

ミトヤ 牧牛

あだ花の後も千なりふくべ哉

起されてからいかにもと夜寒哉

秋もまださびぬ梢やゆずの青^ミ

大馬木 魯川

はせを葉や広がるうちに破れかゝり

川せみやとんぼに替るさらし杭

草刈た跡に残りし野菊哉

少年 尾雀

跡で肩うたせる婆々も碓かな

ひぐらしや暮したいとて啼さふな

蚊の喰ふもしらずに酔ふて涼哉

夜は明たやうでも扣く水鶏哉

むしのねや白ひく音の止てから

茸狩やせめてひとつは買ふてなりと

傘干に出れば柳の雫哉

阿井 何遠

花に寄るは心せましと雲雀哉

雲切れて朝日さしけり鴝の声

菊苗や表屋へ遣るは是ばかり

梢へは届かでも鳶の紅葉哉

拾ひ置し栗や鼠のころつかせ

寐言にもやつぱりまじる踊哉

涼しいに来て見よ葛のうらおもて

芋の葉や請つこぼしつ露深き

馬の数算えん月も山ばなれ

阿井 連中撰
大馬木

「(ウ十六)

洛書林橘屋治兵衛梓

「(見返し紙)

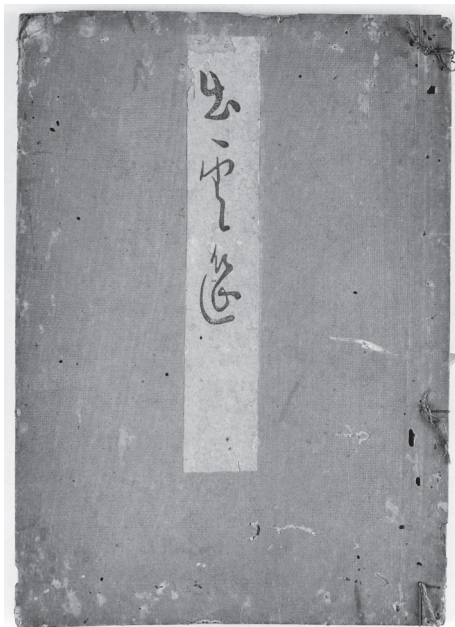
〈付記〉

本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

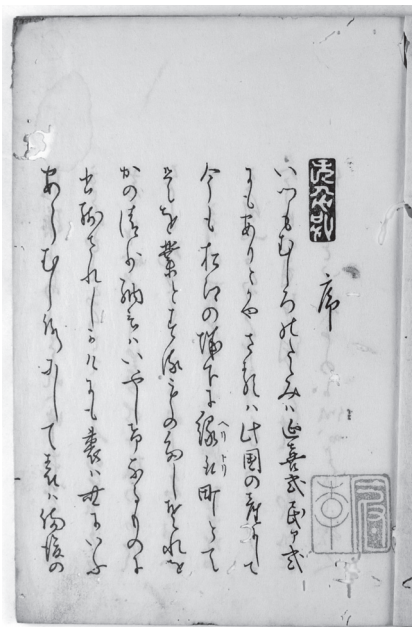
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九〜二〇二一年度、代表・野本瑠美)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「化政期俳諧再評価のための新研究」(研究課題番号 18K00296 代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

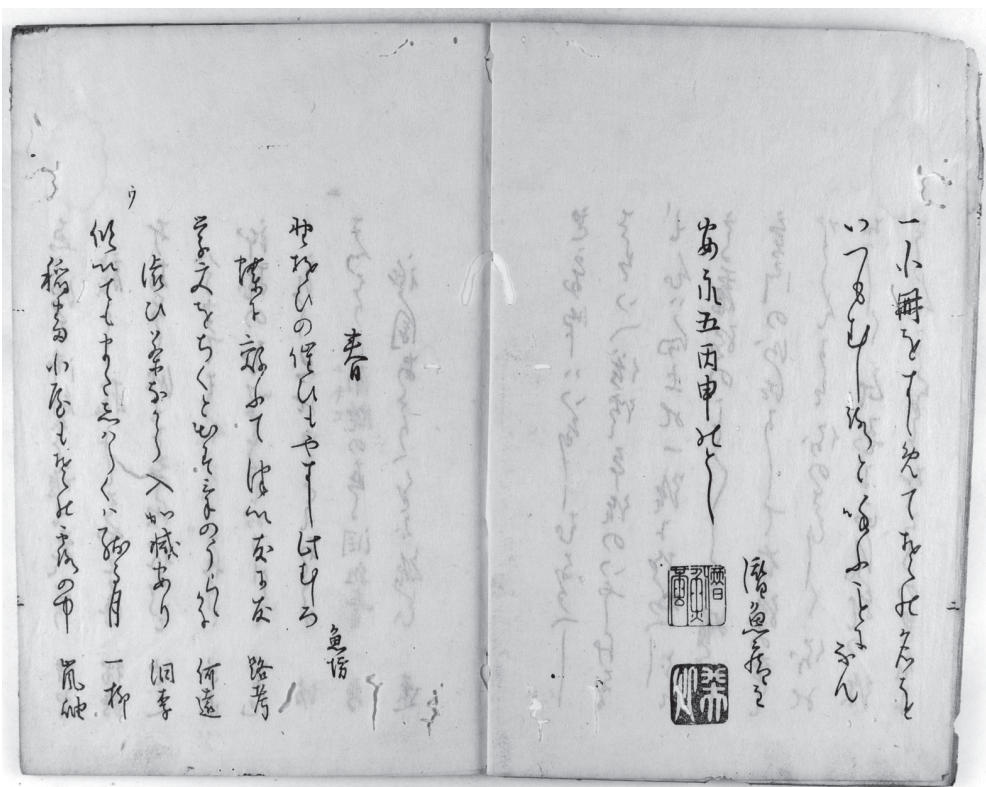
1. 表紙



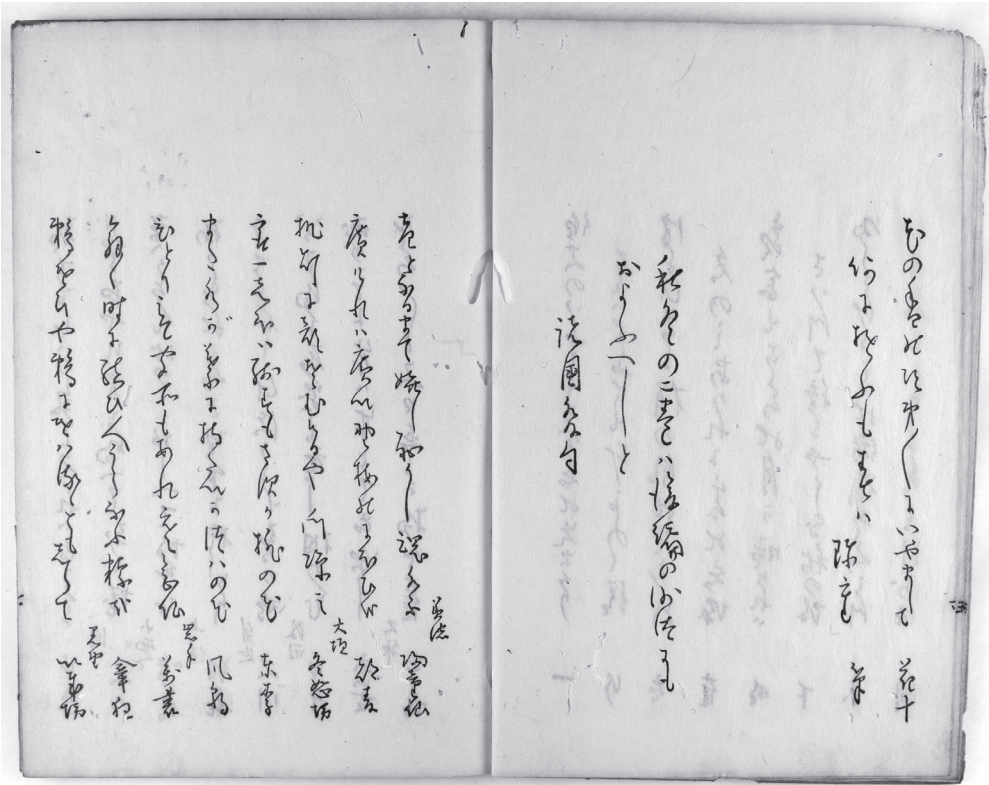
2. 序文冒頭(一才)



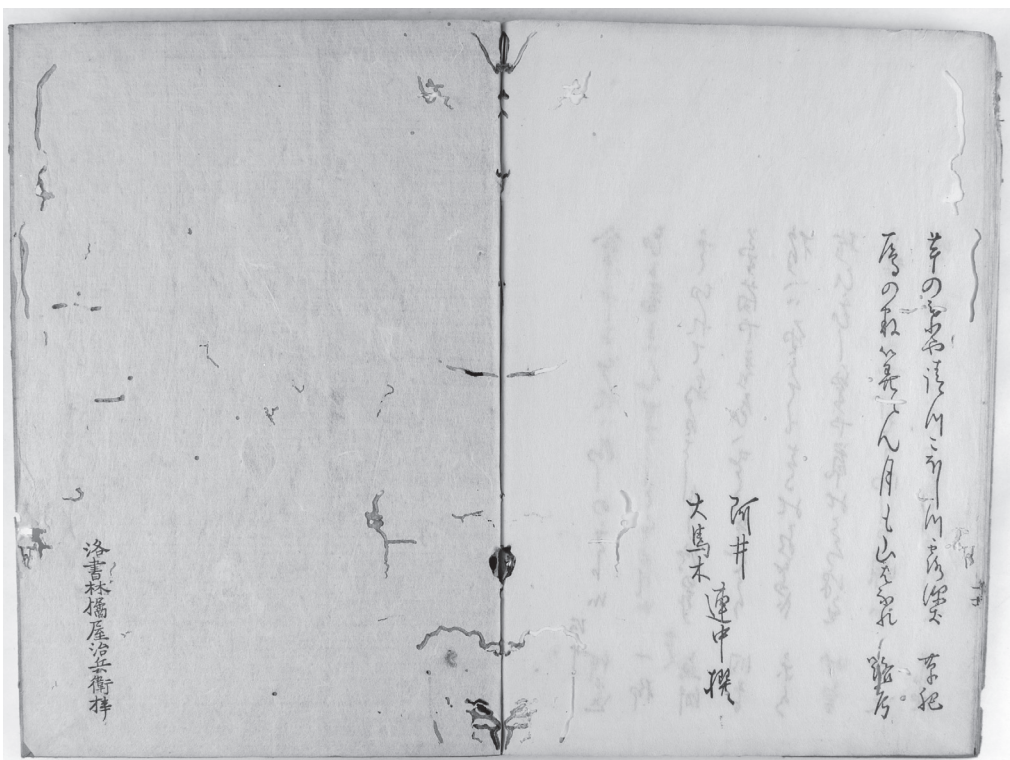
3. 序文末・本文冒頭(二ウ・三才)



4. 本文途中(六ウ・七オ)



5. 巻末(十六ウ・裏表紙見返し)



阿井・大馬木連中編『出雲筵』—手錢記念館所蔵俳諧資料(十三)—(伊藤善隆)

**The edition of “Izumo-Mushiro” by haikai poets
in Ai and Oomaki : reprint and introduction**
— A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (13) —

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

[Abstract]

“Izumo-Mushiro” owned by Tezen Family Archives is edited by haikai poets in Ai and Oomaki. Gyobou, who writes the introduction, is a very important haikai poet in Iwami and Izumo region.

Keywords : Haikai, Minoha, Gyobou, Tachibanaya Jihei, Tezen Museum